



文武に秀でた今川一族

～伝統を守る山西の地～

ストーリーの概要

戦国の世、駿河で名を馳せた今川氏。足利將軍家を武で支える一方で、文化を庇護し、とりわけ歌を嗜む家柄であった。駿河に花開いた今川の武と文化は、徳川家康にも大きな影響を与えている。

今川氏が、駿河で最初の領地を得たのは、当時「山西(やまにし)」と言われた志太地域である。「海道一の弓取り」と呼ばれた今川義元が、歴史の表舞台に登場する契機となったのも「山西」の地である。

今も伝わる駿河今川氏の「文」と「武」を探しに、いざ「山西」へ。



トピック

今川、駿河に起つ



高草山(焼津市)から望む山西の地

- 戦国大名今川氏。9代義元の敗死と、その後の信長の活躍や武田・徳川の駿河侵攻から、歴史の引き立て役に扱われがちであるが、文武で室町将軍家を支える名門であった。
- 戦国大名今川氏が、駿河で最初に得た領地は、当時「^{やまにし}山西」と呼ばれた志太地域の一角にある^{はなしのしょう}葉梨 荘(藤枝市)。
- 「山西」の地と人は、200年をこえる今川氏の歴史の節目節目で大きく関わる。

家督を継ぐもの



焼津市歴史民俗資料館
(焼津市三ヶ名)
・小川城跡の出土品等を展示
時:9:00~17:00、料:無料
休:月曜日(祝日の場合は翌日)

- 今川氏は、義元の代で最盛期を迎えるが、領国支配体制は、その父、^{うじちか}氏親が確立した。
- この2人は、それぞれ身内での争いを制し、家督を継ぐ。
- 2度の家督争いには、山西ゆかりの家臣や城が関わる。氏親を支えた一人が、焼津市にあった^{こがわ}小川城の城主・長谷川氏である。義元と兄との家督争いでは、葉梨城等の「山西」の城で合戦が行われた。

戦国の歌人達



連歌師・宗長の作庭と伝わる柴屋寺庭園(静岡市)

- 今川氏は、文化を庇護した。駿河に赴いた将軍と歌会を催す等、とりわけ「歌」を^{たしな}嗜む家柄であった。
- 家督を継いだ氏親は、島田出身の連歌師・宗長を^{しょうへい}招聘した。宗長は、小川城で城主と3日にわたる連歌会を開催している。宗長が、隠居にあたり^{とげっぽうさいおくじ}結んだ草庵が吐月峰柴屋寺となる。
- 義元の子・氏真が山西の地で詠んだ歌も伝えられている。

伝統を守る山西



「縁カフェ天神森」で販売される朝比奈ちまき(藤枝市)

- 家臣の朝比奈氏は、出陣の際「ちまき」を携行したと記録が残る。「朝比奈ちまき」は、地元の力により現代に復活した今川時代の食である。
- 「山西」に今も受け継がれる、伝統芸能や行事の中には、今川時代に現在の姿が確立したものや、起源が遡るといわれるものがある。
- 今川氏や家臣の菩提寺には、供養塔や古文書が伝わる。

今川一族と「山西」の人々をつなぐ構成資産

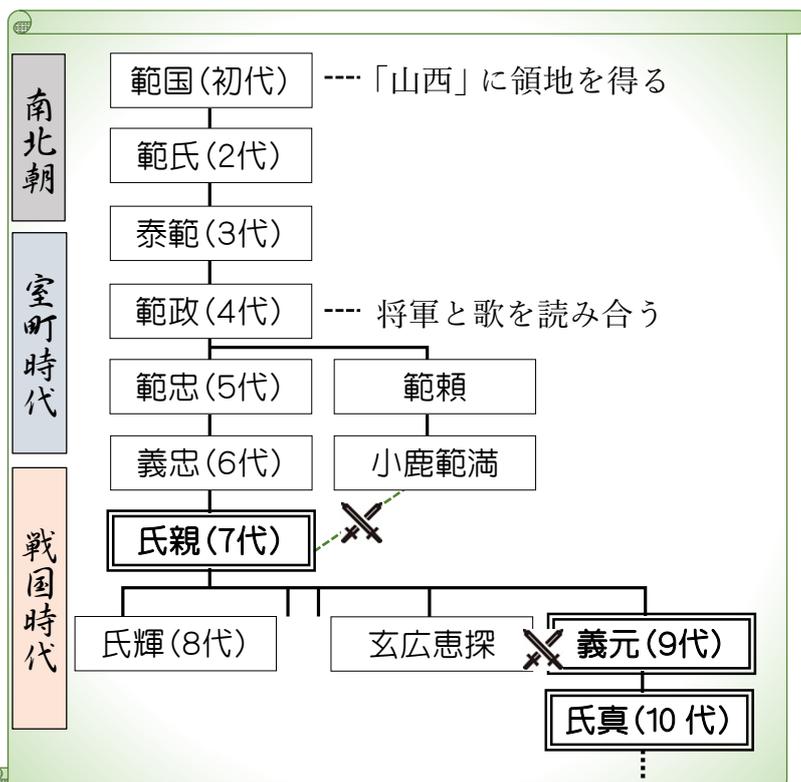
- 義元とその親子を中心に今川氏と「山西」の人々の関わりを物語る4市（藤枝市、焼津市、島田市、静岡市）に所在する 26 件の文化財が構成資産

駿河の覇者「今川家」



- 戦国大名として名を馳せた今川氏。室町将軍家足利氏の血筋にあたる武門の名家であり、歌を嗜む文化の庇護者でもあった
- 今川の文武は、後に、徳川家康にも大きな影響を与えた
- 駿河・遠江に勢力を広げた今川氏が最初に得た領土は、当時「山西」（駿府（静岡）の西に聳える高草山の西側）と呼ばれた志太地域の一角であった

二つの家督争い



- 戦国大名として今川の家督を築いたのは9代義元であるが、戦国大名としての領国支配体制を確立したのは、その父の7代氏親である
- この2人は、それぞれ身内での争いに打ち勝ち、家督を継ぐ
- その争いには、「山西」の地と人が関わる



今川家の家紋
「二引両」

馬印
「赤鳥」



構成資産 1 ～藤枝エリア～

- 駿河の今川氏の物語は、藤枝で本格的に幕を開けた
- 今川氏が初めて駿河で得た領地は藤枝市葉梨地区であり、有力家臣の朝比奈氏、岡部氏の本拠は藤枝市岡部地区にあった
- 今川氏の最盛期を築いた9代義元が、家督争いで兄の玄広恵探げんこうえたんを破り、歴史の表舞台に立ったのもこの地であった



①富士見平 藤枝市若王子

- 蓮華寺池公園内の眺望ポイント。駿府で今川4代範政のりまさと歌合せをした將軍足利義教が、富士山を眺めたといわれる
- 將軍義教は山麓の鬼岩寺きがんじに宿泊した



②長慶寺 藤枝市下之郷

- 今川3代泰範の菩提寺
- 義元の軍師・雪斎が再興し、泰範、雪斎の供養塔(市指定史跡)や、今川氏が発給した古文書が残る



③葉梨城(花倉城)跡 藤枝市花倉

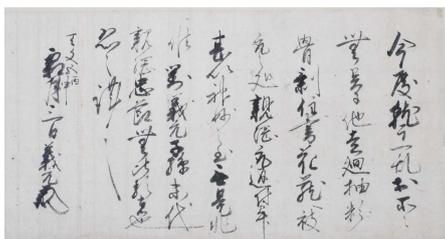
《市指定史跡》

- 義元は、兄と家督を争う(花蔵の乱)
- 花蔵の乱において、兄の玄広恵探げんこうえたんは、葉梨城を拠点、方ノ上城を支城に戦うが、義元に敗れた
- 山頂からは志太平洋野を一望できる



④偏照寺(遍照光寺) 藤枝市花倉

- 義元と家督を争った玄広恵探は、遍照光寺の住持であった
- 今川2代範氏等の供養塔がある



⑤岡部家文書 藤枝市

《市指定有形文化財》

- 花蔵の乱では、朝比奈氏とともに岡部氏が義元を支えた
- 義元が、花蔵の乱における岡部氏の戦功を讃えた古文書は、藤枝市郷土博物館・文学館で公開

藤枝市郷土博物館・文学館(藤枝市若王子)

時:9:00～17:00(入館 16:30 まで)

休:月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始ほか

料:200 円(高校生以上)、特別展は料金別途





あさひ やまじょうあと

《市指定史跡》

⑥朝日山城跡 藤枝市仮宿

- 今川家の重臣、岡部氏が築いたといわれる山城
- 岡部氏は、花蔵の乱でも義元を支えた



ばんしょういん

⑦萬松院 藤枝市岡部町子持坂

- 今川氏の重臣である岡部氏の菩提寺
- 供養塔(市指定史跡)が残る
- 岡部氏は、江戸時代にも家名を残し、子孫は岸和田藩(現大阪府)の藩主となった



あさひ なじょうし

《市指定史跡》

⑧朝比奈城址 藤枝市岡部町殿

- 今川家の重臣、朝比奈氏が築いたといわれる山城
- 谷を挟んで2つの尾根に曲輪くるわが築かれている



あさひ な

⑨朝比奈ちまき 藤枝市岡部町朝比奈

- 朝比奈氏が、出陣の際に携行し、常勝したといわれるパワーフード
- 地元の人々の力で現代に甦り、令和4年3月(2022年)に文化庁が認定した「100年フード」『大井川お茶請け食文化』の一つとなる



あさひ なおおりゅうせい

《県指定無形民俗文化財》

⑩朝比奈大龍勢 藤枝市岡部町朝比奈

- 全長 10mを超える勇壮な打ち上げ花火
- 戦国時代、今川家の重臣である岡部氏と朝比奈氏が「のろし」を上げて連絡を取ったことに由来すると伝わる

隔年 10月中旬に公開



とくのいっしきじょうあと たなかじょうし

《市指定史跡》

⑪徳一色城跡(田中城址) 藤枝市田中1丁目

- 徳一色城は、今川氏の山西における拠点の城郭
- 今川 10 代氏真は、武田信玄の侵攻により駿府を追われる
- 武田信玄侵攻時、徳一色城には家臣の長谷川正長が籠城
- 城主正長の墓は、焼津市の信香院に残る



たきさわ やさかじんじゃ たあそび

《県指定無形民俗文化財》

⑫滝沢八坂神社の田遊 藤枝市滝沢

- 田植から稲刈りまで 19 演目を舞う
- 今川支配下の室町時代に発達した能・狂言の影響を残す

毎年2月中旬に公開

構成資産 2 ～焼津エリア～

- 今川9代義元の父、氏親うじちかも家督争いを経て、今川家の当主となった
- 家督相続まで、氏親は焼津にゆかりのある2人の人物に支えられた
- 一人は、幼い氏親を庇護した小川城主・長谷川正宣はせがわまさのぶ、もう一人は、母方の叔父・伊勢新九郎盛時そうちよ(北条早雲)である
- 当時、焼津にあった小川城では、連歌師・宗長を招いて歌会が催される等、山西における文化サロンでもあった



小川城跡(焼津市西小川)



⑬林叟院 焼津市坂本

- 今川7代氏親を庇護した小川城主長谷川正宣の墓が残る
- 長谷川正信の子孫の一人は、江戸時代に活躍。後に小説の主人公となった長谷川平蔵である



⑭石脇城跡 焼津市石脇上

- 氏親は、従叔父の小鹿範満おしかのりみつと家督を争う
- 家督争いの際、氏親を支えた伊勢新九郎盛時(北条早雲)は、この石脇城を拠点とした



⑮方ノ上城跡 焼津市方ノ上

- 義元と家督を争った兄が拠点とした葉梨城(花倉城)の支城
- のろしにより葉梨城と連絡を取った山城と伝わる
- 伝承に基づく、のろし上げのイベントが毎年秋に行われる



⑯駿河の水産物 焼津市ほか



焼津漁港

- 今川時代、駿府に赴いた公家・山科言継やましなときつぐの日記には、駿河産の魚介を食したことが記される
- 現在、焼津漁港は鯉の水揚げ量日本一を誇り、浜通り地区は漁村の景観を残す



⑰花沢城跡 焼津市高崎

- 駿府ー山西間の日本坂峠越えの街道を抑える今川方の山城
- 武田信玄との激戦地として知られる



ふじもり たあそ
⑱藤守の田遊び 焼津市藤守

《国重要無形民俗文化財》

- 平安時代より続くと伝わる
 - 現在の形式は今川支配下の室町時代に確立された
- 毎年3月17日に公開



やいづじんじゃ
⑲焼津神社 焼津市焼津2丁目

- 今川氏歴代に庇護された式内社
- 大祭で用いられる獅子頭は室町時代が起源であり、当時のものも伝わる

構成資産3～島田エリア～

- この時代、必須とされた教養の一つが連歌^{れんが}である。今川7代氏親に仕えた連歌師・宗長は、島田の刀工初代義助の息子であった
- 今川9代義元の死後、家督を継いだ10代氏真は、駿府に侵攻した武田氏に追われ、永禄11年(1568)に戦国大名今川氏は滅亡した
- 後に、氏真は家康の諏訪原城攻めに参加し、攻略後、一時的に城主となった。この時に詠んだ歌が、島田市に伝わる



のだじょうあと おおつじょうあと
⑳野田城跡(大津城跡) 島田市野田

- 今川は、駿河に領地を得る前、足利尊氏に従い、武功を重ねた
- 野田城は、南北朝時代に今川2代範氏が攻略した大津城にあたりといわれる。その功績は、今川氏の駿河進出の契機の一つとなった



けいじゆじ
㉑慶寿寺 島田市大草

- 今川2代範氏の菩提寺
- 今川家関連文書や伝今川範氏の供養塔が伝わる



そうちょうあんし
㉒宗長庵址 島田市日之出町1丁目

《市指定史跡》

- 戦国時代の島田で生まれた連歌師・宗長を偲んで建てられた庵址

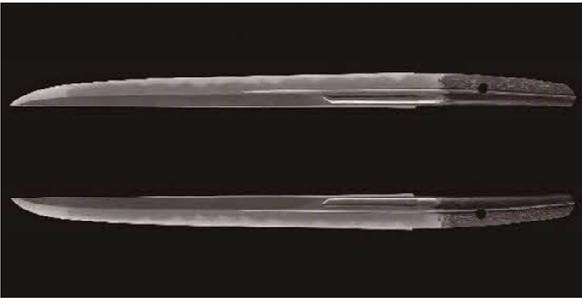


すわはらじょうあと
②③ 諏訪原城跡 島田市菊川

《国指定史跡》

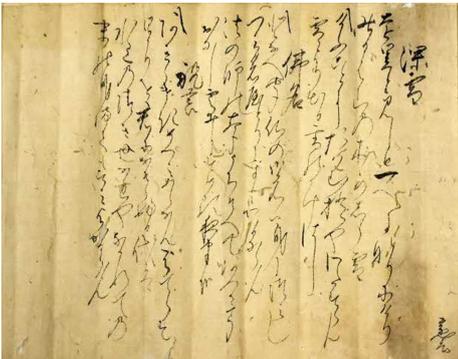
- 徳川氏と武田氏が攻防を繰り返した国境の城
- 家康攻略後は、^{まきのじょう}牧野城と名を改め、一時、今川 10 代氏真が城主を務めた

諏訪原城ビジターセンター（島田市菊川）
 諏訪原城の歴史を学ぶことができる
 時:10:00～16:00
 休:月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
 料:無料



ごじょうよしすけ とうけんるい
②④ 五条義助の刀剣類 島田市

- 五条義助は、室町時代～江戸時代(1450 年頃～1850 年頃)に活躍した刀工
- 島田市博物館では所蔵刀剣等を、定期的に公開



おしおけもんじょ いまがわうじざねわか
②⑤ 置塩家文書(今川氏真和歌) 島田市

- 置塩家は、今川家の家臣と伝わる旧家
- 氏真が牧野城(諏訪原城)在番時に詠んだ和歌も残る
- 島田市博物館の企画展で公開

島田市博物館

時:9:00～17:00(入館 16:30 まで)
 休:月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
 料:300 円(高校生以上)



構成資産 4～静岡丸子エリア～

- 今川7代氏親に仕え、焼津の小川城主と歌会を催した連歌師・宗長は、駿府と山西の間にある丸子(静岡市)に草庵(柴屋軒)を結んだ。後の吐月峰柴屋寺である
- 付近では、丸子名物の「とろろ汁」等も楽しむことができるほか、「匠宿」では静岡の伝統工芸を体験できる



さいおくじていえん
②⑥ 柴屋寺庭園 静岡市駿河区丸子

《国指定名勝・史跡》

- 柴屋寺の庭園は、宗長自らが作庭したことが『宗長手記』に記されている

時:10:00～17:00
 料:大人 400 円(小中学生 200 円)

「文武に秀でた今川一族～伝統を守る山西の地～」のストーリー

○駿河の今川氏

戦国大名として名を馳せた今川氏。義元の代には、駿河・遠江・三河を支配し、東海地方最大の版図を有する大名となったものの、永禄3年（1560）、桶狭間で織田信長に討たれた。

義元没後に衰亡した今川氏は、歴史の敗者として扱われがちであるが、室町将軍家足利氏の血筋にあたる武門の家であり、文化を庇護し、駿河に赴いた将軍と歌会を催すなど、とりわけ「歌」を嗜み、駿河の地に文化を咲かせた名家である。

今川の文武は、幼少期を駿府で過ごした徳川家康にも大きな影響を与えている。家康は人質時代、義元の教育係で軍師でもあった雪斎を師とする。義元と家康はいわば兄弟弟子である。

今川氏の「武」や「文化」を伝えるものの多くは、戦乱により失われたものの、室町時代から戦国時代にかけて駿河を治めた今川氏こそが、家康により花開く駿河の文化の礎を成したと言えよう。

戦国大名今川氏は、駿府（静岡市）を拠点とした。駿府から「高草山」を隔て西に広がる志太地域は、当時「山西」と呼ばれた。「山西」の地と人は、200年を越える今川氏の節目節目に大きく関わる。

○「山西」から歴史の表舞台に ～義元とその父～

今川氏が盛期を迎えたのは義元（9代当主）の代であるが、戦国大名として基盤を固めたのは、父の氏親（7代当主）である。

この二人は、共に家督争いに打ち勝ち、その地位を築いた。2度の家督争いは、「山西」の城が舞台として登場する。

氏親は、父義忠（6代当主）の死去に伴い、従叔父の小鹿範満と家督相続を争う。

氏親を助けたのが、小川城（焼津市）の城主長谷川正宣と石脇城を拠点とした叔父の伊勢新九郎盛時（北条早雲）である。

氏親の家督相続を支えたのが、焼津の人と城であった。「山西」は戦国大名今川氏基盤固めの地である。

氏親の後を継いだ8代当主氏輝は、短命であった。氏輝が没すると、出家していた二人の弟が家督を争う。兄の玄広恵探は、葉梨城（花倉城：藤枝市）を拠点に、方ノ上城（焼津市）を支城に戦うが、弟の梅岳承芳に敗れた。

乱を制した梅岳承芳は、義元と改名し9代目当主となり、駿河今川氏の最盛期を築いた。

この乱で義元を支えたのは、現在の藤枝市を本拠とする岡部氏や朝比奈氏である。今川氏は、駿河における最初の領地として、現在の藤枝市葉梨地区を南北朝時代に得た。そのため、近隣にいた岡部氏、朝比奈氏は早くから今川氏に仕えていた。

「山西」は今川氏の駿河進出の故地であり、義元が世に出るきっかけも「山西」の地であり、その支えは「山西」の武士であった。

○義元の父を支えた「山西」の歌人

「山西」は、今川の文化も支えた。この時代、必須とされた教養の一つが連歌である。今川氏の下で活躍した連歌師が宗長である。

現在の島田市の出身である宗長は、義元の父である氏親により招聘され、駿府と京を往復し歌の他にも様々な情報を氏親に伝えた。



当時「山西」と呼ばれた地域

また、宗長は、小川城（焼津市）で城主と3日間にわたり千句を読み継ぐ連歌会を催している。当時の小川は、陸・海交通の要所として栄え、今と変わらぬ豊かな海産物に恵まれた様子が記録に残る。

宗長は隠居にあたり、草庵を結んだ。宗長作の伝承を持つ庭園が残る柴屋寺（静岡市）である。

なお、宗長は、島田（島田市）で活躍していた刀工の代表的流派、^{よしすけ（ぎすけ）}義助の初代の息子である。義助は、今川の武を助けた山西の技といえよう。今川氏の文化は、都と往来した文化人により育まれたが、「山西」の人々も歌や技術で、今川の文化を支えていた。

○氏真の歌と城

桶狭間の戦いでの義元の敗死後、その子^{うじまね}氏真が家督を継ぐが、武田と徳川に侵攻された。

駿府の地を武田に追われた氏真は西に落ちのびる。今川家臣は^{はなざわ}花沢城（焼津市）や^{とくのいっしき}徳一色城（田中城：藤枝市）で抵抗を続けたが、永禄11年（1568）に戦国大名今川氏は滅亡した。最後まで今川氏を支えたのも「山西」の地と人であった。

なお、氏真は生きながらえ、後に家康の諏訪原城（島田市）攻めにも参加し、攻略後、一時的に城主にもなった。この時、詠んだ和歌も伝わる。その子孫は江戸時代には儀式や典礼に関わる^{こうけ}高家となり、明治時代まで家名は続いた。

「山西」を拠点とした家臣、長谷川や岡部、朝比奈も家名を残す。小川城主長谷川氏の子孫の一人は、江戸時代に火付盗賊改として活躍し、小説の主人公となった長谷川平蔵である。

○今も支えるのは「山西」の人

戦国大名として名を馳せた今川氏、後に侵攻した武田や徳川の活躍により人々の記憶から失われたものは多いが、「山西」の人々により今川の遺産は、今も伝えられている。

一つは、食である。今川氏の重臣、朝比奈氏は出陣時に「ちまき」を携行したという記録が残る。地元では「朝比奈ちまき」として、これを再現した。「山西」の人々の力で復活した今川時代の食である。また、焼津市小川漁港では、今川時代の書物に記された豊かな海産物を今も楽しむことができる。

もう一つは、伝統芸能である。「^{ふじもり}藤守の^{たあそ}田遊び」（焼津市）、「^{たきさわ}滝沢八坂神社の田遊」（藤枝市）は、今川時代に発達した能や狂言などの芸能の要素を残す伝統行事である。

焼津神社の大祭で使用される獅子頭も、オリジナルは今川時代の所産である。また、藤枝市に伝わる^{あさひな}「朝比奈大龍勢」は、戦国時代に朝比奈氏と岡部氏が、のろしを上げて連絡を取り合ったことに由来すると言われる。いずれも、「山西」の人々の力で現代にまで受け継がれてきた今川時代の伝統である。焼津市の方ノ上城でも、伝承を基にした「のろし上げ」のイベントが、秋に行われている。

今川氏や家臣の古文書や供養塔を伝えてきた社寺、ハイキングコースとなった合戦の舞台の山城を巡り、地元で守り、再現した今川時代の伝統に触れれば、今川氏栄枯盛衰の物語と今なお今川氏の遺徳を偲び、伝統を守る山西の人々が織りなす戦国ロマンの新たな一頁が、あなたの心に刻まれるだろう。

しずおか遺産

「文武に秀でた今川一族

～伝統を守る山西の地～

代表連絡先

担当 藤枝市スポーツ文化観光部文化財課

電話 054-645-1100

E-mail bunkazai@city.fujieda.shizuoka.jp

住所 〒426-0014

静岡県藤枝市若王子 500